

水郷の歴史とその形態的特徴を用いたまちづくり

木川 剛志* 西尾浩一* 野尻奈央子**

The study of riverside districts and town development based on their morphological characteristic

Tsuyoshi KIGAWA* Kouichi NISHIO* Naoko NOJIRI**

The purpose of this paper is to investigate the riverside space and find an essence of constructing beautiful and ecological villages. In this study, we have carried out case studies on riverside districts, Itako, Ohmi-Hachiman, and Harie, and analyzed their morphological characteristic. With these studies, we have found four types in the riverside districts, which are district of picture, of traffic, of sightseeing and of ecology. By means of the typology, we found that how the word of Saigon could be divided in the meaning.

Keywords: 水郷, 川端, 低炭素・循環型システム, 観光, 地域計画

1. 背景

人口減少、少子高齢化、財政緊縮といったこれまでの社会的トレンドに加えて、2011年に起こった東日本大震災も一つの契機となり、現在、日本において持続的な地域の構築が国策として、重要な課題となっている。持続可能な社会のために、国は「低炭素・循環型システムの構築」と「地域の集約化」を重点目標と位置づけている¹⁾。このような社会的背景の下、本研究は、全国の「水郷」を事例として研究し、それらの類型化した上で、形態を分析し、その知見を福井県内をはじめとしたまちづくりに有効に活用することを目的としている。

水郷とは「すいごう」と読むのが今日では一般的であるが、かつては「すいきょう」と読み、文人趣向の強い景観に対して使われる言葉であった²⁾。その水郷は、現在までに、水辺に位置する集落のことを一般に意味するようになった。この現在の意味が広く世間に認知されるようになったのは、国土交通省が主幹となって水環境保全の重要性についてPRするために1996年に選定した水を活かした地域づくり、水の郷百選の選定が一定の役割を担ったと言える³⁾。水の郷100選では、河川の保全に関するもの52地域、湧水・地下水については26地域、湖7地域、森林7地域、水田7地域と、合計107地域が選ばれている。それぞれの地域、たとえば大野市では「名水と朝市のまち越前おおの」などそれぞれの水郷のテーマが選ばれている。

このように、全国に水郷を旗印としたまちづくりの動きが活発に見られるようになってきている。しかし、多くの地域で、かつて形成された古き良き日本、の一事例としての水郷に脚光を当てているだけの事例が見受けられる。近世期に形成された堀が、現在まで保全されていたとしても、その堀は、かつての用途で用いられるわけではない。その活用のために適用されるのは、観

* デザイン学科 ** 産業ビジネス学科

光である。しかし、本研究の目的が福井県内のまちづくりにあるとすれば、それは観光資源の発掘ではなく、これからのライフスタイルの提案である。そのため、全国で水郷として知られる地域で実際に調査を行い、その水郷の意味、そして、そこから読み解く事のできるライフスタイルの提案のために、比較検証を本稿では行った。



図1 潮来の風景

2. 事例研究

2.1. 茨城県潮来市

茨城県には霞ヶ浦に面して多くの水郷と呼ばれる集落が位置している。特に、佐原、潮来、鹿嶋は、共同で観光地域づくり実践プランを立ち上げ、水郷三都という名称をブランドに地域資源の活用を目指している⁴⁾。本研究では、この水郷三都のうち、潮来市の現地調査を行った。潮来市は、地元選出の国会議員、橋本登美三郎（1901-1990）による観光事業や橋幸夫の「潮来笠」のヒットによって全国的に知られた水郷である。しかし、その歴史は古く、源頼朝によって1185年に創建された長勝寺が街の中央に位置し、この寺の鐘は1330年の铸造で、国の重要文化財に指定されており、銘には「客船夜泊常陸蘇城」とある。この銘によって当時より、中国の蘇州の水郷が意識されていたことがわかり、貴重な資料となっている。

現在の潮来市は六月にあやめ祭りや、嫁入り舟などの観光資源を持つが、それ以外の時期はシーズンオフとして、閑散期を迎える。一年を通じて、前川の十二橋めぐりなど、観光舟が運航している。現地在住の観光舟の船頭さんに聞くと、潮来地区には、かつては農業用の水路が張り巡らされていたが、高度成長期にほとんどが埋め立てられ、農道となったそうである。そのため、かつては農家の主要な交通手段だった舟の実用性は失せ、かつての縦横に張り巡らされた水路から形成された水郷の様相は現在には見られない、という。

2.2. 滋賀県近江八幡市

近江八幡市は琵琶湖の東岸に位置する街である。湖ちかくには葦（現地ではヨシと呼ぶ）が生育し、そこより内陸に位置する八幡山にはかつて城があり、その山下には琵琶湖からの水脈を利用した堀が張り巡らされ、その堀は八幡堀と呼ばれる。この八幡堀周辺には城下町が形成され、この城下街を中心に現在の西川産業に代表されるような近江商人が全国との商業を展開し、その繁栄によって商家町が建設された。八幡堀を中心とした地区は、1991年に国の重要伝統的建造物群保存地区として選定され、2006年には、この八幡堀と葦群生湿地とを合わせて、重要文化的景観選定制度適用の全国第1号として「近江八幡の水郷」の名称で選定をうけている。その後、周辺の集落が追加選定を



図2 近江八幡市 八幡堀の風景

受けて、水郷の地区は広がっている。

近代以降も、米国人建築家ヴォーリズが近江兄弟社を設立とともに建築活動の中心として在住するなど、景観として美しい建築が作られてきた。重要伝統的建造物群保存地区選定後も、伝統様式を現代に再解釈する手法で知られる出江寛によって設計されたかわらミュージアムが建設されるなど、景観を活かした観光地としての整備が現在まで進んでいる。

観光地としての整備は、多くの場合、実際の都市生活とは相容れない整備となることが多い。近江八幡市の場合も、八幡堀は、すでに交通としての機能は失い、「八幡堀めぐり」とよばれる観光舟は就航しているが、観光客に人気のある「水郷めぐり」は葦の群生地に張り巡らされた水路を巡る。よって、近江八幡市において、水郷は、八幡堀ではなく、葦群生地を指す言葉として認識されていると考えられる。

2.3. 滋賀県高島市針江区

針江区は、琵琶湖西岸に位置する高島市の一地区であり、川端（かばた）と呼ばれる独特の生活空間を持つことで知られる集落である。この地区の標高は周辺よりも一段低くなっており、その特性から、比良山系の伏流水が豊富に集約しているため、この地区ではどの場所でも20mほど掘削するだけで非常に良質な井戸水が湧く。さらに、その井戸水は枯れることがないので、排出のための水路が集落の中に張り巡らされている。この地区は2004年に放送されたNHKのドキュメンタリー番組「映像詩 里山～命めぐる水辺～」によって非常に有名になった地区であり、この番組は多くの国際コンクールで入賞するなど世界的に高い評価を受けている。

この地区では井戸水が生活の糧となっているが、各家庭では湧き出した水は元池という器に貯められ飲み水に使われる。そこから流れでる水は壺池と呼ばれる場所に貯められ、これは野菜を洗ったりと生活用水に用いられる。そして、その生活排水は畑池へと流され、ほとんどの家では畑池で鯉が飼われている。この鯉は残飯処理など、畑池の環境維持に役立つ。この、元池、壺池、畑池を合わせて、「川端（かばた）」と呼ぶ⁵⁾。また、この地域はかつては舟での交通も盛んであり、琵琶湖までの水路が現在でも生きている。針江区の住民は、琵琶湖沿いに現在でも田を持ち、かつてはその田まで舟で行き来したが潮来と同様に自動車による交通へとすでに変化している。



図3 潮来市 ©Google



図4 近江八幡市 ©Google



図5 高島市針江区 ©Google

3. 考察

ここまで述べてきた限られた事例の水郷の現地調査からでも、水郷の示す形態には、それぞれ異なったものがあることがわかる。多くの場合、水郷地区は、近代以前から続く水運のための水路がその基盤にあることがわかった。今回、事例として挙げた、潮来、近江八幡、針生のうち、近江八幡のみが商業を中心とした水路網であり、それ以外では農業用の水路が基盤となっている。また、針江の水路は、農業用の水路とともに、域内を流れる井戸水の排水路も重要な水郷的景観形成に役立っているが、この地区の特色は、川端を中心としたライフスタイルにある。このような特徴をまとめると、以下の4類型が提案できる。



図6 針江区 川端の様子

a. 山水的水郷

文人的趣味により、理想的景観として提起されている水郷の具現化によって生まれた類型である。潮来の長勝寺の鐘の記述のように、中国の景勝への憧れから水郷景観が形成された箇所があったと推測できる。

b. 交通型水郷

農業用、商業用のために水運交通のために形成された水路立脚した水郷。かつての潮来や近江八幡の八幡堀界隈の水郷はこれに当てはまる。

c. 観光型水郷

現在の潮来や近江八幡の湿地帯のように、かつては交通型として機能した水郷を活用して、観光資源化したもの。

d. 環境型水郷

以上のような水郷的景観ではなく、針江地区に代表されるような水を介して形成された生活環境が主たるものとなった水郷。

4. 今後の課題

本稿では、これまでに現地調査した水郷の特徴を比較分析し、その類型の提案を行った。今後は、その各類型の特徴からまちづくりに応用可能な要素を分析し、新しい提案を行いたい。

謝辞

本研究は福井工業大学特別研究費クラスタ研究E「持続可能で活力ある地域づくりプロジェクト～水郷の研究と福井市周辺地区への応用～」の補助によって得られたものである。ここに記して感謝したい。

参考文献

- 1) 国土交通省：「まち・住まい・交通 創蓄省エネルギー化の総合的な支援について」2013年3月14日閲覧，http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/environment/sosei_environment_fr_000119.html
- 2) 横尾文子(2009)：「北原白秋の目を通してみた柳川の水郷景観」，佐女短研究紀要 第43集：1-14
- 3) 水の郷百選，<http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/mizusato/index.htm>，2012年12月10日閲覧
- 4) 水郷三都のホームページ <http://www.suigosanto.com/about.html>，2012年12月10日閲覧
- 5) 小坂育子(2010)：「台所を川は流れる－地下水脈の上に立つ針江集落」，新評論

(平成25年3月31日受理)